平成２１年度　特別研修　研究報告書

身近な人々とかかわる力を育てる指導の工夫
―相手意識をもつためのかかわりの体験の活動を通して―

幼児教育センター
眞下　由香（幼稚園教諭）
髙橋　純代（小学校教諭）

Ⅰ　主題設定の理由

今日、子どもを取り巻く環境は、少子化や核家族化などの社会の変化に伴い、人とのかかわりが希薄になりつつある。そのような中でコミュニケーション力不足、自制心や規範意識の希薄化といった問題も指摘されており、人間として生きる力の育ちや幼児期からの心の育ちの在り方も、改めて課題となっている。今回、改訂された幼稚園教育要領および小学校学習指導要領においても、人とのかかわりの側面から見た幼児期・児童期の教育の重要性がさらに強調されている。

子どもの実態を見ると、自分の思いをなかなか表すことができない、逆に自分の思いを通すばかりで相手の思いを受け入れることができない、そのため友達と一緒の活動が継続せず途中で遊びから抜けてしまうといった様子が見られる。また学習活動では、自分と教師の関係の中だけで活動を進めていこうとする傾向が強く、学習課題を解決する際に、友達と思いや考えを伝え合いながら解決の仕方を考えていこうとする場面が少ない。異学年間の子ども同士でも、かかわり方が分からず、縦割り活動などにおいて交流できずにいる場面も見られる。

これらの原因として、子ども自身の人とかかわる経験が少ないことが考えられる。そのため、思いや考えを双方向に伝え合い、互いを受け入れて認め合ったり、意見が異なるときには試行錯誤をしながら葛藤を乗り越えたりするなど、人とかかわることによる充足感を味わう経験が不足していると考える。伝え合うためには、自分以外の存在である相手を意識することが必要であるが、相手意識が育っていないととらえられる場面が多い。

かかわることへの意欲や気持ちをもち、かかわる対象である相手がどのような思いや考えをもっているか知りたいと思うことで、相手意識が生まれる。相手意識が育っていくと、相手に合わせたり配慮したりする気持ちが芽生え、立場の違う相手の気持ちを考えられるようになる。互いの気持ちを考えながらかかわることで、両者の間には温かい関係が生まれる。そこに充足感が生まれ、人とのかかわりの楽しさや喜びを味わうことができるようになると考える。

そこで本研究では、人とかかわる経験が少ない子どもたちが人とかかわる経験ができるように、「かかわりの体験の活動」を取り入れていく。「かかわりの体験の活動」とは、「人とかかわることへの意欲や気持ちをもつ。かかわりの擬似体験を行う。そして、かかわりの対象からの感想や賞賛を知る」という一連の活動と考える。擬似体験とは、幼稚園では、ごっこの中でそれぞれの立場で遊ぶこととととらえ、小学校では、学習の中で役割演技をして相手の気持ちや立場を考えることととらえる。相手意識は単独で機能するものではなく、実際に相手を理解しようとしたり、相手に合わせて伝え方を工夫したりする活動と密接に関連しながら機能するものと考える。そのかかわりの体験の活動において、相手意識を大切にし、それぞれの立場で伝え合い、やりとりをする活動を工夫していけば、身近な人々とかかわる力を育てることができると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらいと課題解決策

１　研究のねらい

遊びや異学年交流の中で、相手意識をもつためのかかわりの体験の活動を工夫すれば、人とかかわることへの意欲を高めることができ、身近な人々とかかわる力を育てることができることを、実践を通して明らかにする。

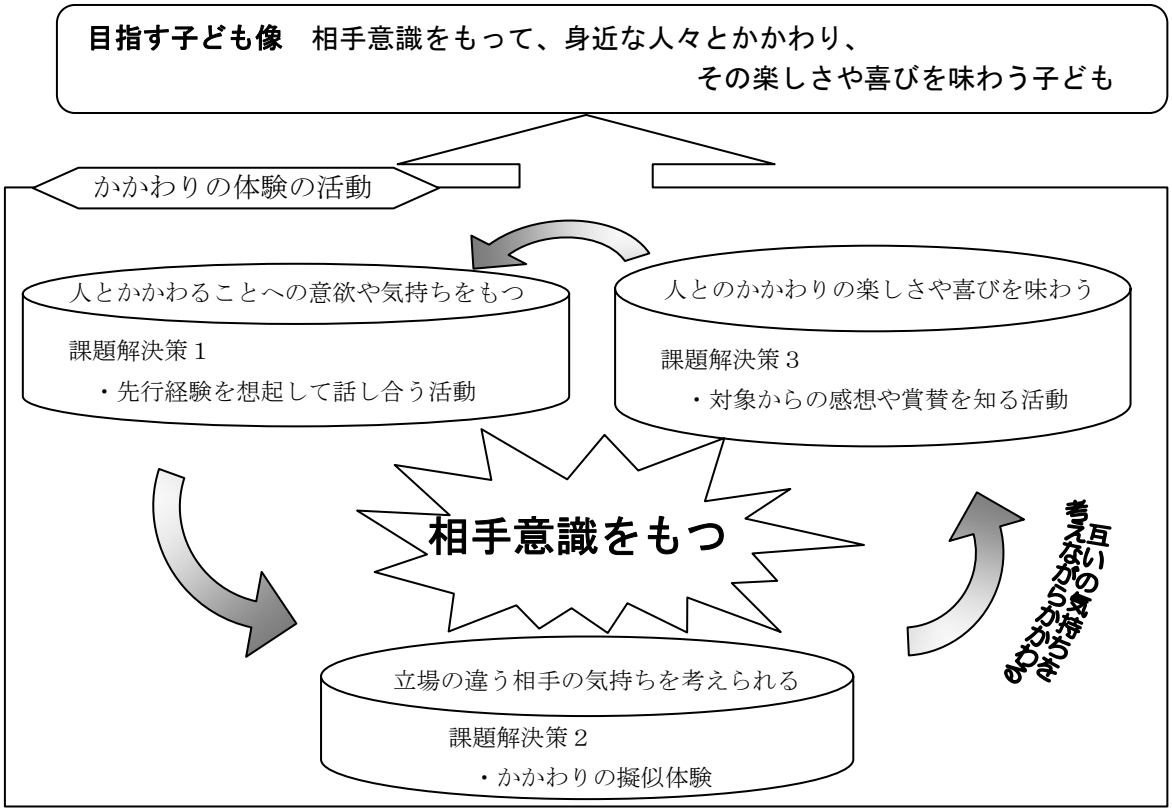
２　課題解決策（手だて）

（１）先行経験を想起して話し合う活動を取り入れれば、かかわることへの見通しをもったり、かかわることの楽しさを感じたりし、かかわることへの意欲や気持ちがもてるようになるであろう。

（２）かかわりの擬似体験を取り入れれば、相手意識が生まれ、立場の違う相手の気持ちを考えられるようになるであろう。

（３）対象からの感想や賞賛を知る活動を取り入れれば、人とのかかわりの楽しさや喜びを味わうことができるであろう。

３　研究の構想図



４　研修計画

対象	二年保育五歳児(年長)	小学校　二年生
単元名等	事例「お誕生日ならローソク付いてた方がいいよね」	「みんなでつくろう　フェスティバル」
期間	平成２１年１０月～１１月	

５　検証計画

検証項目	検証の視点	検証の方法
課題解決策１	かかわることへの意欲や気持ちがもてるようになったか。	発言、言動、ワークシート
課題解決策２	相手意識が生まれ、立場の違う相手の気持ちを考えられるようになったか。	発言、言動、ワークシート
課題解決策３	人とのかかわりの楽しさや喜びを味わうことができるようになったか。	発言、言動、ワークシート

Ⅲ　課題解決のための具体的実践

授業実践１

事例　「お誕生日なら、ローソク付いてたほうがいいよね」（五歳児１１月）
ねらい：友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりしながら遊びを進めるようになる。
これまでの遊びの概要　遠足で拾ってきたドングリを段ボールの切れ端にボンドで貼り付けたものを、ケーキに見立てて「ケーキやさんごっこ」が始まった。しかし、店の人になりたい幼児が多く、「お客さんがいない」と教師に訴えてくる。

○幼児の姿　Ｔ教師のかかわり

＜課題解決策１＞年中児を誘いたいという気持をもてるように、一学期に年中児と一緒に遊んだ「お祭りごっこ」での楽しかった経験を想起する活動
Ｔ　「お祭りごっこの時年中さんを誘ったら楽しかったよね。あの時みたいに、年中さんを誘ってあげたら？」と言葉がけをする。 ○　Ａ男「お祭りごっこ楽しかったよね。あの時もお客さんになる子がいなくて年中さんがお客さんになってたくさん来てくれたんだよね」Ｂ男「そうだね、また年中さんに来てもらおうよ」Ｃ男「おいしいケーキがありますよって誘ってこよう」と言って年中の保育室から年中児４、５人を誘って連れてくる。 　年中児が客となって参加してくると、Ｃ男が「欲しいケーキがあったら、このお盆に乗せてね」と教え、年中児が選んだケーキをＡ男がケーキボックスに丁寧に詰めて「はい、お待たせしました。おいしく食べてくださいね」と言いながら渡すなど、客を気遣うやりとりが続く。

＊「お祭りごっこ」の経験を想起できるように教師が言葉かけをした。そのことにより、一学期に年中児をお祭りごっこに誘って一緒に遊んだ楽しかった経験を思い出し、年中児に客として来てもらって一緒にお店屋さんごっこをしたいという気持をもてたと考える。

＜課題解決策２＞客として来る年中児の気持ちを考えられるように、年中児が誕生日用のケーキを買いに来るという場面を設定した「ケーキやさんごっこ」
Ｔ　「今日はＫ先生のお誕生日なんだ。お誕生会をしてくれると嬉しいな」と言葉がけをする。 ○　しばらくすると「今日はＫ先生（年中児担任）のお誕生日なんだって。だから、Ｋ先生にケーキを買っていくの」と年中児が来店する。すると、Ａ男「お誕生日かあ？じゃあ、ローソクが付いてた方がいいよね。何本かな？」と、ストローをローソクに見立てボンドで貼り付けたケーキを差し出す。「うーんとね、２０本くらい？」と要求する年中児にＢ男「ごめんね、６本しか付いてないや。それでもいい？」年中児「うん、いい。それでもＫ先生喜んでくれるよ」と言葉を交わしながらケーキをケーキボックスに詰めて渡す。

＊「ローソクがついていた方がいいよね」「ごめんね、数が足りない」という言葉を使ったやりとりは、相手の気持ちを考えている姿であると考える。「誕生日」という言葉がキーポイントになり、自分の誕生日での経験から相手の気持ちになれたと考える。

＜課題解決策３＞年中児とかかわって遊んだことの楽しさや喜びを味わえるように、対象のＫ先生や年中児から喜んでもらったり、認めてもらったりする活動

Ｔ　「わあ、先生にケーキ買ってきてくれたの？嬉しいな、ありがとう。おいしそうなケーキだね」と年中児が買ってきたケーキで誕生会ごっこをする。その様子を「ケーキやさんごっこ」をしている年長児に伝え、「見に行ってみようか」と誘う。
○　Ｂ男「お誕生会してるんだって。見に行ってこようか？」と言い、Ａ男、Ｃ男を誘って年中児の誕生会の様子を伺いに出かける。すると、Ｋ先生から「年長さん、おいしいケーキありがとうね。ローソクも付いていて嬉しかったよ。みんなでふぅって消したんだよ。これからおいしくいただきますね」と言われ、「喜んでもらえてよかったね」「これからもっともっとお客さんが来るかもしれないから、いっぱいケーキ作ろうよ」と嬉しそうにケーキ作りを張り切る姿が見られた。

＊相手を思いやって渡した「誕生日用ケーキ」で、年中児が担任と誕生会を楽しんでいる様子を見たことや、その担任から嬉しい気持ちを伝えてもらったことで、自分たちも嬉しい気持ちになって満足感をもち、人とのかかわりの楽しさや喜びを味わうことができたと考える。だからこそ、ケーキをもっと作ってお客さんにまた喜んでもらいたいという人とのかかわりに対する積極的な姿につながったと考える。

授業実践２

単元名　小学校二年生　生活科　「みんなでつくろう　フェスティバル」　全２１時間
単元の目標：今まで体験したり、見たり聞いたりした行事を参考に、友達と協力して、自分たちのフェスティバルの企画や準備を工夫して行い、一年生を招待してみんなでフェスティバルを楽しむことができる。

１　課題解決策１に対する授業実践　　全２１時間中の第１時

○　昨年度招待された体験を、写真や思い出をもとに想起して、一年生と一緒に楽しめるフェスティバルにするにはどうしたらよいか話し合う活動

○　展開　「一年生が楽しめるフェスティバルを考えよう」

学習活動	支援・指導上の留意点	児童の様子
○　昨年度のフェスティバルでの経験を振り返る。 ○　フェスティバルの計画を立てる。	○　昨年度の経験を想起できるように、昨年度のフェスティバルの写真を提示する。 ○　楽しいフェスティバルにするためにはどうしたらよいか考えるよう促す。	 **～昨年度の様子～** **「どうすれば一年生も楽しめるかな」**

＊子どもたちは、昨年度のことをよく覚えていて、感想や思い出を、活発に発表した。
　その中で、「とても楽しかった」「二年生のお兄さんお姉さんがとてもやさしかった」「もっとたくさん一緒に遊びたかった」「自分たちも二年生になったらやってみたいと思った」という楽しかったことの発表が多かった反面、「説明の仕方が分からなかった」「二年生が言っていることが難しかった」「二年生たちだけで遊んでいて、話ができなかった」などの理由で楽しめなかったという子どももいた。このような先行経験を生かし、一年生と一緒にフェスティバルを楽しめるように考え計画を立てていった。「遊びの内容を簡単にする」「ルールが分かるように、分かりやすい言葉で教える」「漢字ではなくひらがなで書く」など、一年生をお世話してあげたいという気持ちや、一年生と一緒にフェスティバルを楽しみたいという意欲をもつ姿が見られた。

２　課題解決策２に対する授業実践　　全２１時間中の第１１時

○　一年生と一緒に楽しめることを意識したお店作りを考えることができるように、店番役（二年生役）と客役（一年生役）に分かれて役割演技をする活動

○　展開　「お店やさんごっこをして　一年生の気持ちを考えよう」

学習活動	支援・指導上の留意点	児童の様子
○　お店やさんごっこをする。 ○　意見交換し、改善点に気付く。	○　店番役（二年生役）と客役（一年生役）に分かれ、役割演技をしながら店で遊ぶようにする。 ○　一年生と一緒に楽しめることを意識して店作りを考えるよう促す。 ○　気付いたことはワークシートに記入できるようにする。	 店番役「いらっしゃいませ」 客役「ここはどんなお店なのかなあ」

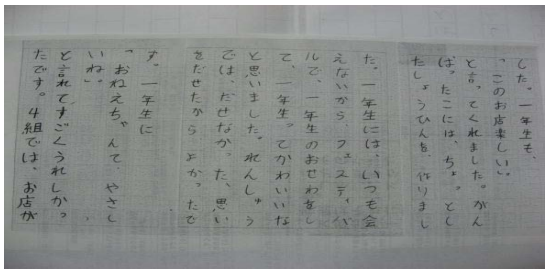
＊子ども同士が互いの店で店番役と客役に分かれて役割演技をした。

役割演技の中で、客役は一年生だからフェスティバルの内容については何も分からないという前提で、店番役は一年生の立場に立って考えながら、「最初にチケットを渡してね」「こういうふうに遊ぶんだよ」などと説明していた。客役の子どもは、「次はどうするの」「難しくてできないよ」などと言いながら一年生役を演じていた。活動後にワークシートに書かれた内容では、「一年生役をして楽しかった」「お店の人が何も教えてくれなくて遊び方が分からなかったので、一年生には分かりやすく説明してあげたい」「きちんと説明してもらった子と、そうでない子がいた」「一年生にとってこの遊びをクリアするのは難しすぎる」「同時にお客が大勢並んでしまい、相手をするのが大変だった」などがあった。子どもたちは、実際に両方の役割演技をしたことで、それぞれの立場で相手にかかわっていくことを擬似体験し、相手意識をもち、相手の気持ちを考えることができたと考える。

３　課題解決策３に対する授業実践　全２１時間中の第２１時

○　人とかかわることの楽しさや喜びを味わうことができるように、一年生のフェスティバルの感想や賞賛を知る活動

○　展開　「一年生に　ありがとうって言ってもらったよ」

学習活動	支援・指導上の留意点	児童の様子
○　単元全体を振り返り、感じたことを発表し合う。	○　振り返るときの視点の一つとして、「一年生とのかかわり」を示していく。	 二年生の作文「・・おせわをして一年生ってかわいいなって思いました。 『やさしいね』って言われてすごくうれしかったです」

＊フェスティバルの当日、二年生は一年生に声をかけて、自分の店で遊ぶように誘ったり、困った様子の一年生を見かけると、「どうしたの」と声をかけたりしていた。遊び方を、一年生にも分かるように平易な言葉で繰り返し説明したり、実際に手を動かして見本を見せたりする二年生もいた。一年生は、会場の店を次々と遊んでまわり、二年生が作ったおみやげを受け取って、「ありがとう」と言う姿も見られた。後日、一年生一人一人からお礼の手紙をもらった。

二年生の子どもたちは一年生の手紙を読み、「やった」「よかったね」「一年生が喜んでくれて嬉しいな」などと互いに口にしていた。

また、日頃、自己中心的な言動を繰り返し、一人で遊ぶことの多かったＡ男も、「ありがとうって言ってもらって嬉しかった。ぼくも一年生の時は、あんな感じだったんだな。また一緒に遊びたい」という感想を発表し、人とかかわっていくことの喜びや楽しさを感じることができたと考える。

Ⅳ　研究の成果と課題

１　成果

本研究では、同じ主題のもと、幼稚園年長児と小学校２年の生活科の指導の在り方を考えてきた。年長児と小学校２年生では、発達の段階が異なるとともに、幼稚園と小学校では教育目標も異なる。幼小の子どもの実態について互いにあまりつかんでいないというのが実情であった。そこで、幼稚園教育要領と小学校学習指導要領のつながりを照合して考えたり、保育や授業を参観し合ったり、小学校の単元構想について学び合ったりした。その結果、課題解決策にあげたように、先行経験の想起、かかわりの擬似体験、対象からの感想や賞賛という、指導の工夫における共通項を見出すことができた。

楽しかった遊びや学習（先行経験）について、想起して話し合ったり、友達から話を聞いたりすることにより、かかわることの楽しさを感じ、自分もやってみたいという気持ちをもったり、これから行う活動の見通しを友達同士で共有したりして、もっと人とかかわって楽しみたいという意欲につながった。

遊びや学習の中に擬似体験を取り入れたことで、子どもたちは楽しみながらそれぞれの立場になりきることを体験した。体を使って楽しみながら立場になりきることで、相手意識が生まれ、自然とそれぞれの立場でものを見たり考えたりしようとすることができた。

かかわった対象からの感想や賞賛を知ることにより、他から見た自分の姿を見ることができるようになるとともに、他への親しみを深め、人とのかかわりの楽しさや喜びを味わうことができた。他から認めてもらうことで喜びを感じ、自己有用感をもち、人とさらにかかわっていくことへの意欲が高まったと考える。

今回の活動の中で、幼稚園、小学校共に、日頃、自己表現をあまり得意としていない子どもが、自分から友達の輪に入り、積極的に自分の主張をしたり、活発に遊んだりするように変容したことは、大きな収穫であった。また、共通の目的をもつことにより、自分の意見と他の意見が異なるときにも、折り合いをつけたり交渉したりして、自分たちで解決していく態度が徐々に身に付いてきた。

２　課題

本研究の主題で掲げた「人とのかかわり」は、人が社会生活を行っていく上で欠かせないものである。幼稚園では「かかわりの体験の活動」を繰り返し、自分の思いを伝えたり相手の思いを受け入れたりする喜びや葛藤などを十分に経験することが大切であり、また、その経験を小学校に伝える努力をすることも必要である。子どもの経験が小学校に引き継がれ、授業の中で一人一人の発想が生かされ、互いの考えを伝え合いながら学び合っていくことにつながれば、子どもたちに真の意味での「生きる力」が身に付くであろう。今回は、幼稚園の内容と生活科の内容でのつながりを考えたが、幼稚園の内容と各教科の内容での「学び」のつながりを考えていくことが必要であると考える。

本研究では友達や下級生とかかわる実践を行った。今後子どもたちが出会い、かかわりをもつ人々の範囲はさらに広がっていくが、その広がった人間関係においても、相手意識を大切にすることは欠かせないものになるであろう。今後はかかわりの質を高めたり、かかわりを広げたりするための教師の援助や支援の在り方を探る必要があろう。